

倉橋惣三との対話⑩ 最終回

子ども時間をいとおしむ

浜口順子

(大学教員)

大人時間と子ども時間の間で

倉橋先生の著作の中でも『育ての心』は今も再版を重ね、最も人気があるのだそうです。熱烈なファンもいますから、好きな一節はどれ、などと話し始めたらしまらなくなる方も少なくないでしょう。1926年の『幼稚園雑草』刊行以降に書かれた文章が、倉橋先生自身によって選択され1936年にまとめられました。1940年の再版に際して、「時と所とを識らず、未見の読者と結ばれている誼よみこそ嬉しい。その誼みに或いは浅深の差はあっても、誰か、好意なくして、わざわざ他人の書を繙ひもとく人があろう。その好意に於て、読者は与え手で、著者は幸なる受け手である。」と書いています。解釈はその時代の読者に任せようと言ってくださっているようですので、今日は私の大好きないくつかの文章についてお話ししたいと思います。

一つは「飛びついて来た子ども」という、最初1934年に弊誌の巻頭言として書かれた10行足らずの文章です。

子どもが飛びついて来た。あっと思う間にもう何処かへ駆けて行ってしまった。その子の親しみを
氣のついた時には、もう向こうを向いている。私は果たしてあの飛びついて来た瞬間の心を、その時
びったりと受けてやったであろうか。それに相当する親しみで応じてやったろうか。

後でやっと氣がついて、のこのこ出かけて行って、先刻はといったところで、活きた時機は逸し去っ
ている。埋めあわせのつもりで、親しさを押しつけてゆくと、しつこいといったような顔をして逃げて
いったりする。其の時にあらずんば、うるさいに相違ない。時は、さっきのあの時であったのである。

いつ飛びついて来るか分からない子どもたちである。

『倉橋惣三選集第三卷』フレール館 1965年所収『育ての心』から p.40

昭和9年頃、幼稚園主事（園長）時代、少し考え事か、他の先生と立ち話でもしていたのかも
しれません。「おじちゃん先生」の愛称で親しまれていた先生は、飛びついて来た子どもにとっ
さに対応できなかつた。後から埋めあわせをしようと近づいても、子どもは「しつこいといった
ような顔をして」もう取りあつてくれない。遅かつたか！ ということろです。

私がこれを読んで面白いのは、大人世界と子ども世界の違いを、先生が潔いほどに認めている
ことです。子どもたちの世界は世界としてそこに厳然としてあつて、大人でもむやみに近づけな
いという現実を倉橋先生が謙虚に受け入れていること。だからこそ、大人と子どもが触れあうチ
ヤンスが巡ってきた瞬間に、それを捉えることがとても貴重で大きな意味をもつことになります。

最近の日本の子育てで、子どもの主体性・自発性を尊重するために（それ自体、あるべき態度

ですが、大人側が主体的な働き掛け（子どもに提案や意見を言うなど）を避け、消極的になりがちな風潮が見られます。虐待が深刻化する反面、子どもの心は弱いからと、できるだけ失敗や逆境の体験を遠ざけて守ってあげなくてはならないというような過保護的な考え方がいびつに強化されているとも言えるでしょう。その意味で、現代人は「慎重」に子どもとかわるようにはなっているものの、逆に、子どものやりたいという気持ちに応答するタイミングには無頓着で、子どもが大人に要望をぶつけてきても、「後でね」とか「来週やりましょうね」と先延ばしにして「埋めあわせ」をする場合が多くなっているとは言えないでしょうか。多忙により生活を消耗している感覚はおそらく、倉橋先生の時代よりも現代人のほうが顕著で、それだけ大人の見方や都合で時間を区切ろうとする「大人時間」が絶対化し、計画を変えたり待たたりすることが苦手になっているとも考えられます。「子どもの要望に応えています」とは思っていますが、一人ひとりの子どもの心もち（不特定多数の子どもたちの要望ではなく）に真摯しんしに向かいあえているかを根本的に問い直すよう突き付けられているような気がします。

自然時間の前に対等な大人と子ども

倉橋先生が「飛びついて来た子ども」では大人世界と子ども世界の違いを厳然と承認しているのに、次の「霜柱」では、子ども世界への割り切れないセンチメンタルな思いが垣間見えて興味深いです。

幼稚園の庭に初めての霜が来た朝である。ぽかぽかと暖かい日光を浴びながら保育室の入口に立つて

いると、二人の子どもが駆けて来て、いいものを見せてあげようといって手を差し出した。可愛い両手を重ねて大切そうに何か持っているのである。なんでしょうと私が聞くと、容易には見せられないといった顔付きを見かわして、二人いっしょに手を開いた。一人の手には溶けかけの霜柱が、それもまだ氷の形をして白く残っている。次の子の手には、泥にぬれた赤い掌の中で、霜柱がもうすっかり溶けてしまっている。

心なの霜柱よ。なぜ、どの子の手にも握られていて呉れないのか。

(同 P.41)

掌の霜柱がじきに溶けてしまうのは、大人をもつてしてもいたし方のないことです。壮大なる自然時間の前では、大人も子どもも対等です。せつかくの霜柱の形がなくなっていることに気づいた子どもは心もちを、懸命に受けとめようとした倉橋先生の最後の一行は祈りのようです。こうした場面で、「仕方ないよ、水は暖かい手の上では溶けてしまうんだ」と科学的な説明をする大人もいるでしょう。でもそれにどんな意味があるのでしょうか。乳幼児期は世界のあらゆることに目を見張り、驚きをもつて捉えます。この驚き、そしてそれを大人が肯定的に受けとめることが非常に重要です。論理的思考が始まる前の乳幼児期に、自然の驚異を、人間の思い通りにはいかな自然の力をじっくりと体験しておくことが、将来、自然科学の厳然とした法則性を真に主体的に学ぶ上で不可欠です。そして、大人たちが用意した概念を知らされる前に、子どもが子どもなりの世界の見方をすることを肯定され、子どもも時間をゆつくりと大切に保障されることが、偏見を疑う世界の新しい見方を育て、人への優しさの根になるに違いありません。

—終わり—